

周作人・豊一父子と濱一衛・ふみ夫妻の書簡往来

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院

顧, 偉良
弘前学院大学文学部 : 教授

李, 麗君
元・九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/7173426>

出版情報 : 言語文化論究. 52, pp.155-174, 2024-03-15. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



周作人・豊一父子と濱一衛・ふみ夫妻の書簡往来

中里見 敬*・顧 偉 良†・李 麗 君‡

現代中国を代表する文学者で北京大学教授の周作人（1885-1967）は、1934～36年北平に留学した濱一衛（1909-1984）を自宅に寄寓させ、家族ぐるみで暖かくもてなした^{注1}。それに先立つ1930～31年、京都帝国大学の学生だった濱一衛は、周作人の子息・周豊一（1912-1997）が大阪の旧制浪速高等学校に留学した際に交友を深めていた^{注2}。留学から帰国後の濱一衛は、1939年夏に北京の周家を一度だけ再訪するものの、戦後再会することはなかった。

近年、周家・濱家双方のご尽力により、濱の留学中から逝去までに交わされた書簡15点の存在が判明した。2018年2月6日九州大学で開催されたシンポジウムにあわせて、書簡の一部が中央図書館で公開・展示され、また現存する全書簡がシンポジウム論文集に掲載された^{注3}。

戦争、国交断絶、文化大革命といった困難な時代の中で、友情を大事に守り続けた周家と濱家の交流はそれ自体、後世に伝える価値のある貴重なものであるが、同時にまた周作人研究、および中国演劇研究者である濱一衛の学術的背景を理解するうえでも重要である。本稿では先のシンポジウム論文集（予稿集）に収録した書簡を再掲するにあたり、翻字の誤りを正し、訳文を推敲し、注を大幅に増補した。さらに周家から新たに提供された新資料——濱一衛逝去後にふみ夫人から周家に送られた和服——を加えて発表するものである。なお、紙幅の都合により、書簡の図版はシンポジウム論文集第3冊資料編をご参照いただきたい。翻字にあたっては原文の字体や仮名遣いを尊重した。

注1 拙稿「濱一衛の北平留学：外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」（『言語文化論究』35、2015）参照。

注2 拙稿「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015）参照。

注3 「濱一衛より周作人・周豊一宛書簡8通」、「周豊一より濱一衛・濱ふみ宛書簡7通」（『『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、冰心、濱一衛』国際シンポジウム論文集』第3冊 資料編、2018所収）。九州大学学術情報リポジトリで、図版とともに公開している（<https://hdl.handle.net/2324/1913966>および<https://hdl.handle.net/2324/1913967>）。

1. 濱一衛より周作人・周豊一宛書簡8通（1936年5月8日～1942（？）年1月30日）

原文日本語、中国語翻訳：顧偉良、書簡所蔵・画像提供：周吉宜
留学中の旅先からの絵葉書に始まり、帰国の報告、『春水』手稿をはじめとする周作人から贈られ

* 九州大学大学院言語文化研究院・教授

† 弘前学院大学文学部・教授

‡ 元・九州大学大学院言語文化研究院・准教授

た本や新聞雑誌のお礼、召集の顛末、翻訳の相談、北京での仕事の斡旋を依頼する内容等が含まれる。留学から帰国後も、周作人が濱のために様々な便宜を図っていたことが、これらの書簡からうかがわれる。残念ながら、周作人から濱一衛宛の返信は残されていない。

【書簡 1-1】 1936年 5月 8日 濱一衛より周豊一宛絵葉書（民国25年 5月 9日 南京消印）

杭州では新々旅館二泊、五月三日朝七時五十五分の列車で九時半頃蘇州着。当日中に見物を済まし、四日夜は丁度来蘇中の麒麟童の芝居を聴き、四日【五日】早朝七時の湖州行きの船で南潯に向いました。嘉業堂で三泊し、本日朝九時半の船で蘇州に引き返し中で、目下船中に居ります^{註4}。間に合えば、午後四時上海発の汽車を蘇州でキャッチしようと思っています。駄目ならば、前に泊った鐵路飯店に泊り、明朝南京に向います。南京に二泊して、済南に一泊し帰平しますから、十二日の朝には北平へ帰れると思います。既う相当参って来ましたから、十二日より早くなるとも、遅くなる事はありません。上海では色々面白い物を見物する心算だったのですが、金が無いので、見物しませんでした。Grand Theatre や Rity 等の電影館は立派でしたが、それより回力球の面白さには感心しました。最初の日は大丸君^{註5}、六元損しましたが、僕は二元勝ちました。其次の日、大丸君二十元程もうけ、僕も十五元程勝っていましたが、遂に三元負けました。一衛

【書簡 1-1 中国語訳】 1936年 5月 8日 濱一衛致周丰一信（明信片）

在杭州新新飯店住了两晚，五月三日晨七点五十五分坐火车去苏州，九点半左右抵达。当天游览。四号晚上观看了正好来苏州的麒麟童的京剧。四号早晨七时许坐上开往湖州的船，去南潯，在嘉業堂住了三宿。今天早上九点半坐船返回苏州，现正在船上。若来得及的话，在苏州能赶上下午四点从上海出发的火车。不行的话，在以前住过的铁路飯店住一宿，翌日早晨去南京。南京住两宿、済南一宿，然后回北平。十二号早上可回到北平。已经很累了，或许早于十二号，但不会迟于十二号。本来打算在上海逛逛一些有趣的地方，可是由于没钱，所以没去观光。Grand Theater（译注：大光明电影院），Rity 等电影院十分壮观，但给我留下更深刻印象的是回力球。第一天大丸君输了六元，我赢了两元。第二天大丸君赢了二十元左右，我也赢了十五元，但最后还是输了三元。一卫

^{註4} 九州大学附属図書館演文庫には1936年5月3日夜、麒麟童（周信芳）の出演する蘇州・金城大戲院の戲単が所蔵される（浜文庫／集181／44）。『演文庫戲単図録：中国芝居番付コレクション』（花書院、2021）238頁。戲単の日付は、濱の行程と1日ずれがある。当日の戲単が売り切れて前日のものしか入手できなかったか、あるいは主要な演目は2日連続同じであったため4日に新たな戲単を印刷しなかったのか、理由は不明。

濱の実際の旅程は以下のとおり。5月3日杭州8時55分発の閩京聯運特快通車で上海北站に12時45分着。嘉業堂訪問の許可を得るために、その足で上海の劉承幹宅を訪れた。その日は上海で1泊し、5月4日上海北站8時発の滬京特別快車で、9時27分蘇州着。昼間見物の後、4日夜に觀劇。5日朝の船で南潯へ向かった。南潯の嘉業堂で3泊し、5月8日朝、蘇州へ戻る船中でこの絵葉書を書いている。蘇州14時53分発の閩京聯運特快通車（閩口発上海經由南京行き）に乗れば、南京には19時過ぎに着く。列車時刻表は『旅行雜誌』第10巻第2号（1936年2月）による。5月3日に濱が上海で劉承幹を訪問したことは、劉承幹『求恕齋日記』第11冊（北京：国家図書館出版社、2016）422-423頁による。「[閏三月]十三日[五月三號]陰。午後日人濱一衛[京都文化會]持授經丈介紹函來，欲至南潯書樓參觀，由剛甫代見，作書致韵秋，交其帶往。伊明後日即須動身也。」（[]は原注、句読点は引用者による。授經は董康の字。剛甫は劉承幹の秘書・沈家樞の字。韵秋は嘉業堂の編目部主任・施維藩の号。）拙稿「演文庫に所蔵される南潯戲単の由来について：附 濱一衛著「劉氏の嘉業堂」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2012/2013）も参照。

注5 『北平の中国戯』（秋豊園、1936）の共著者・中丸均卿を指す。

【書簡 1-2】1936年6月13日 濱一衛より周豊一宛葉書（昭和11年6月14日大阪中央消印）

本日午後四時、神戸港に歸着しました。塘沽を午前三時に出たため、予定より一日早く十三日に着いた譯です。税関では別に問題は無かつたのですが、土曜日なので、書物検査係が居なかつたので、月曜日に更に検査し直しです。

長城丸は兵隊が乗つてゐて満員なので参りましたが、海がとても平穏静で、四疊半分の場所も、楽なものでした。想像してゐた程、歸國したといふ感激も無く、大連へ旅行した様な氣分で、両親や兄嫂が来てゐたので、幾分日本へ歸つたといふだけで、外の人々が、日本の山水を賞したり、道路の清潔を口々に讃へてゐても、別に何の感じもありません。落ち着いたら、消息致します。

六月十三日夜

【書簡 1-2 中国語訳】1936年6月13日 濱一衛致周豊一信（明信片）

今天下午四点抵达神戸港。因为凌晨三点从塘沽出发，比预定提前了一天，所以十三日就到了神戸港。出关时没遇到什么麻烦。因为是周六，无书籍检察员，星期一再检查。

長城丸載滿了士兵，真有点受不了。大海风平浪静，坐的地方只有四席半榻榻米大，还算好。无想象中的那样有回国激动之情，和去大连旅行时的心情差不多。因父母兄嫂都来接我，所以多少有点回到日本的感觉。其他人都在赞美日本山水，赞美道路清洁，我却没什么特别的感觉。等安顿好后再联系。

六月十三日晚

【書簡 1-3】1937年2月11日 濱一衛より周作人宛葉書（昭和12年2月13日大阪中央消印）

拜啓 永々御無沙汰致してゐます。皆々様御達者で御座いますか。小生身体だけは達者です。先日周君より佐世保から葉書頂きました。随分大変な所へ行かれたものですね。何の為か知りませんが、見當はつきます^{注6}。何れ京阪神でお目に掛れませう。今日は紀元節ですが、北平では旧正で大変でせう。昨夜は爆竹で賑やかだつたでせう。今年も大きい爆竹買ひましたか。一年の早いのに今更の様に驚きます。昨日、燕都梨園史料續編を頂きました^{注7}。毎度難有う御座います。頂くばかりで濟まないと思つてゐます。

では皆々様に宜敷く。

昭和十二年二月十一日紀元佳節の佳日 濱一衛

【書簡 1-3 中国語訳】1937年2月11日 濱一衛致周作人信（明信片）

拜啓 好久未通信了，不知大家情况如何。小生身体尚可。前些天收到周君从佐世保寄来的明信片。他去的那个地方也许很不寻常，我大概可猜出他为何去那种地方。早晚在京都、大阪、神戸那一带能见到他吧。今天是纪元节，北平在过春节，昨晚放爆竹一定很热闹吧。今年您家又买了大鞭炮吗？到了现在尤其觉得一年过得真快！昨天收到《燕都梨园史料续编》，非常感谢。总是蒙您惠赐，真是过意不去。代问大家好。

昭和十二年二月十一日紀元佳節佳日 濱一衛

注6 この佐世保訪問について、周豊一は後に回想記「四度目の海渡り」で次のように記している。「母が急

に盲腸の手術を受けるために、ある日本人の病院に入院した。僕はその附添いとなった。……簡単に言えば、一目である外科の看護婦さんに惚れ込んでしまったのだ。相手も義理のある許婚者があるにもかかわらず、僕とつきあって恋に落ちたのだった。……僕は冬休の二週間を利用して、彼女の弟のいる佐世保へ行って……、彼女の婚約が解除されるように企てたのだった。……事は思ったよりも順調に運んだ。……福岡で二三日滞在した。厚くもてなされて、僕が申込んだ、国の大学を卒業したら九州帝大の大学院へ入籍する願いも、快よく頷かれて僕を大いに悦ばした。……ところが、人間は常に運命に弄ばれるという古い話の如く、冬休以来企てたことは、七月七日の日本軍国主義による罪悪に充ちた軍事行動で悉く砕かれてしまい、何にもかも黄粱の夢になった。」(周豊一「記憶の中から：荻盧雜憶(二)」、『颯風』15、1983)

注7 周作人より贈られた張江裁輯『燕都梨園史料續編』(北平：松筠閣書店、1937)は、現在、濱文庫所蔵(濱文庫／集129／1-4)。

【書簡 1-4】1939年9月22日 濱一衛より周作人宛葉書(昭和14年9月22日松山消印)

先日召集の節は種々御世話様に相成り有難う御座いました^{注8}。先日(九月十三日)突然召集解除を命ぜられ、只今松山に歸り従前通り教鞭を採つてゐます。

それで又先生の隨筆の譯をやつてみたいと思ひます。勿論何時でも結構ですから、御説の様な御氣に召した題目名を、お知らせ下されば幸甚です^{注9}。非常に拙いのですが、家内と寫した兵隊姿の寫眞がありますが、焼増して後日お送りします。ご笑覧下されば幸甚です。

九月二十二日 一衛拜

【書簡 1-4 中国語訳】1939年9月22日 濱一衛致周作人信(明信片)

上次应征入伍之际给您添了很多麻烦，甚谢。前几天(九月十三日)突然接到解除兵役的命令，现已回到松山，和以前一样在教书。

为此我又有了翻译您随笔的念头。请在方便之际告知您中意的作品名，幸甚。让您见笑，我有一张穿着军服与妻子拍的照片，过些日子加印后寄去。请笑览为幸。

九月二十二日 一卫拜上

注8 1939年8月、北京を再訪し周家に滞在していた濱のもとに、召集を知らせる電報が届き、急遽帰国したことを指す。拙稿「九州大学附属図書館濱文庫所蔵の『春水』手稿：周作人、冰心、濱一衛」(『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、謝冰心、濱一衛)花書院、2019) 21-22頁参照。

注9 現在、濱文庫に所蔵されている周作人著、濱一衛訳『日本隨筆 原稿』(濱文庫／日文小説／7 (1-2))は、この時期に翻訳した原稿だと推測される。また周作人著『日本隨筆 油印』(濱文庫／新学評論／12, 13)は、松山高等商業学校で教材としてガリ版印刷したものである。収録されるのは、「關於日本語」「我是猫」「市河先生」「日本語本」「冬天的蠅」「日本之再認識」の6篇。

【書簡 1-5】1939年11月2日 濱一衛より周作人宛書簡(昭和14年11月4日松山消印)

今度は冰心女士の春水の原稿本を下さつて有難うございます^{注10}。冰心の繁星さえ読んでない程で恥しく思ひます。何にしても貴重な品を頂戴して御礼の申し様も有りません。私の書齋に貴重本が一冊出来た譯で迎も嬉しう御座います。又新聞や雑誌を種々御恵与下さつて難有うございます。

八月御宅で電報を受取つてから、帰国、入隊、訓練とそれこそ大層な苦勞を致しましたが、残念乍ら一ヶ月で召集解除になつて、現在は昔通り教鞭を執つてゐます。

何時か先生がお仰の氣に入つた隨筆の題名と集名をお閑の節、お教へ下されば幸甚です。ぼつぼ

つ譯してみたいと思つてゐます。

土産に貰つた木綿は家内が迎も喜んで、自分の母に敷布一枚分、私の母にエプロン一枚分、分けて残りは大切に箆筒に入れてゐます。使ふ時には惜しさうにしてゐます。色々お世話になつた上、土産の心配迄かけて濟まなく思つてゐます。おばさんに宜敷く御鳳聲下さい。

ここに送ります寫眞は九月二日に寫したのです。家内は寫りが悪いから他家へは上げて呉れるなと申しますが、特にお送り申します。私の母はまるで兵隊さんが、女給をつれて写した様だと冗談を申していました。同じのは三おばさんに上げて下さい。末筆ながら時節柄御自愛の程お祈り申します。

昭和十四年十一月二日

一衛拝

【書簡 1-5 中国語訳】1939年11月2日 濱一衛致周作人信

这次收到惠赠的冰心女士的《春水》手稿，非常感谢。我连冰心的《繁星》都未读过，惭愧至极。将如此贵重的礼物赠送给我，不知如何感谢为好。我的书房里又多了一册珍本，甚喜。并感谢赠送各种书籍和杂志。

八月份在您家里接到电报后即回国入伍参加训练，十分疲累。遗憾的是在一个月后即解除了兵役，我和以前一样仍在教书。方便时请告知您中意的随笔作品名，不胜荣幸。我打算一点一点地翻译。

惠赠的棉布礼品，我妻子十分高兴。她给她母亲做了一条床单，给我母亲做了一个围裙，剩下的藏在衣柜里不舍得用。给您添了这么多的麻烦，且又惠赠礼物给我，真是过意不去。代问伯母好。

寄去的照片是九月二号拍的。我妻子不上像，虽然她说不要给人家看，但我还是寄给您。我母亲开玩笑说，这张照片像是军人带着女招待拍的。三伯母那边也请送一张。季节多变，请多保重身体。

昭和十四年十一月二日

一卫拜上

^{注10} 冰心『春水』手稿本は現在、濱文庫所蔵（濱文庫／集15／1）。現存する冰心の完全原稿として最も早いもので、中国現代文学の貴重資料である。注8前掲の拙稿「九州大学附属図書館濱文庫所蔵の『春水』手稿：周作人、冰心、濱一衛」参照。

【書簡 1-6】1940年11月29日 濱一衛より周作人宛書簡（昭和15年11月29日松山消印）

拝啓 相不変御無沙汰申してゐます。先生には御元氣の由で何よりと存じます。創元社より出ることになつてゐる御高選の笑話は大體譯したのですが、不明の箇所が少なくありません^{注11}。ここに別便で、先日頂いた笑話選をお送り申しますから、呐喊の様にしてお教へ下さいませ^{注12}。

又戯曲小説の類で（現代の物）譯出する價値ある者をお教へ下さい。譯す可きものはない等と仰せにならず、二三お擧げ下されば幸甚です。

既に「熊佛西」のものは平易な点を取扱として、教科書の類に入れることにしてゐます^{注13}。この次には「李健吾」のものを選びたいと思ふのですが、この人のものに、集がありませんか。なければ、單行本には何、雑誌に載つたものは何、とお教へ下さい^{注14}。

皆様には其後如何お暮しでございますか。楊さんはもう北京へ帰られましたでせうか。豊一兄に赤ちやんが出来たでせうか。(當方は頻りに努めてみますが、次が出来ません。秘方御傳授下されば、望外です)。皆様によろしく。

十一月二十九日

一衛拝

【書簡 1-6 中国語訳】1940年11月29日 濱一卫致周作人信

拜启 好久没通信了。知道先生很健康无比高兴。将由创元社刊行的您所选《笑话集》基本上已译完，但有多处不太明白。另将上次收到的《笑话选》寄给您，跟上次《呐喊》一样，请赐教。

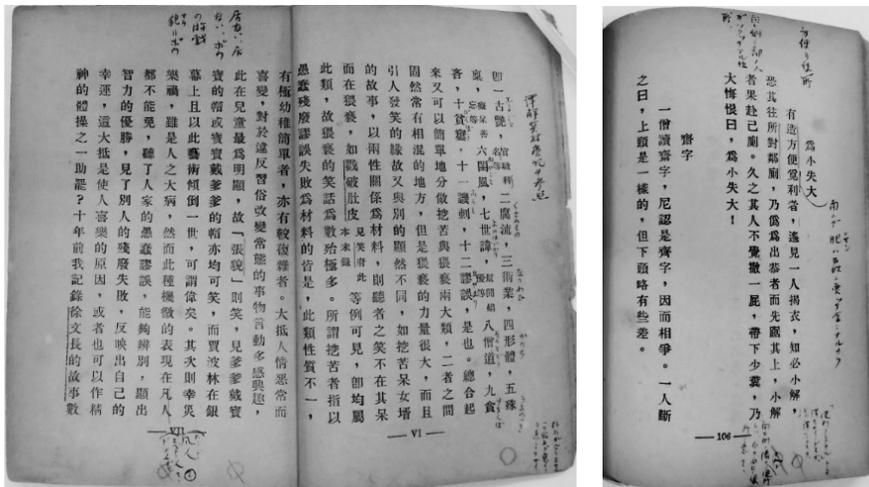
另请告诉我值得翻译的现代戏曲小说。不要说没有值得翻译的，请指出两三篇即可。

熊佛西的作品中选了浅显易懂的部分，把它收录到教科书里了；其次想选李健吾的作品，尚不知他有无文集？如没有的话，请告诉在单行本或在杂志上有无发表过什么。

从那以后大家的生活都好吗？杨兄回到了北京没有？丰一兄有孩子了吗？（本人正在不断努力，但下一个孩子尚无结果，若有秘方当为意外之喜。）代问大家好。

十一月二十九日

一卫拜上



周作人編『苦茶菴笑話選』（浜文庫／新学諷刺／3A）の書き込み。下部が濱による質問、上部が周作人の教示。

注11 現在、濱文庫に所蔵される周作人著、濱一衛訳『苦茶菴笑話選 原稿』（浜文庫／日文風刺／4、序文のみ現存）は、創元社の原稿用紙に書かれている。1941年4月25日付けの「訳者の言葉」もあり出版間近だったようだが、結局実現しなかった。「訳者の言葉」に「この譯書を世に出す機会をつくって下さった吉川幸次郎先生に謝意を表すると共に、親切に御教示を賜ふた周先生と、この原稿を通讀して下さった魏敷訓兄に改めて感謝しなければならぬ」とある。『苦茶菴笑話 原稿』（浜文庫／日文風刺／3）は東京原稿用紙Jに書かれた草稿で、全文が現存する。朱字の書き込みは、魏敷訓によるものと推測される。

注12 濱文庫には周作人編『苦茶菴笑話選』（上海：北新書局、1933）が2冊所蔵される（浜文庫／新学諷刺／3、3A）。後者（3A）は、濱が質問を記した同書に、周作人が回答して返送したものとされ、周の人柄を伝える貴重な資料である【上の図版参照】。この書簡によると、魯迅『呐喊』についても以前同じように周

作人に教示を請うたようだが、その本は濱文庫に所蔵されていない。

注13 熊佛西（1900-1965）は劇作家。濱が松山高商で教科書として使用したガリ版刷りの熊佛西の脚本4種が、濱文庫に所蔵されている。『藝術家 油印』（浜文庫／新学戯曲／265A）には「昭和十六年九月——十七年二月迄、第一回D組使用」との書き込みあり。『王三：醉了 油印』（浜文庫／新学戯曲／266）には「昭二十二年十二月十四日講起」とあり、『一片愛国心 油印』（浜文庫／新学戯曲／267）には「昭和十五年度、第二学年ニ講読ス。謄写ハ永田、首藤二君ノ書ク所、感謝ノ意ヲ表ス。昭和十六年四月、今橋識」とある。もう1点は『洋状元 油印』（浜文庫／新学戯曲／268）で、濱が熊佛西の作品を継続的に教材としていたことがわかる。

注14 李健吾（1906-1982）は作家、劇作家。濱文庫には李健吾の作品が8種10冊所蔵される。出版年が1940年前後のものは、濱の要望に応じて、周作人が送ったものかもしれない。

- ・李健吾「意大利遊簡」（上海：開明書店、1936年4月初版）（浜文庫／新学地理／22）
- ・李健吾「梁允達」（上海：生活書店、1934年10月初版）（浜文庫／新学戯曲／163）
- ・李健吾「以身作則」（上海：文化生活出版社、1936年5月第三版；1936年8月第四版）（浜文庫／新学戯曲／164、164A）
- ・李健吾「母親的夢」（上海：文化生活出版社、1939年8月第四版）（浜文庫／新学戯曲／165）
- ・李健吾「新学究」（上海：文化生活出版社、1940年1月第三版）（浜文庫／新学戯曲／166）
- ・李健吾「這不過是春天」（上海：文化生活出版社、1940年7月初版）（浜文庫／新学戯曲／167）
- ・李健吾「十三年」（上海：文化生活出版社、1939年4月初版；1940年9月再版）（浜文庫／新学戯曲／168、168A）
- ・李健吾「使命」（上海：文化生活出版社、1940年3月初版）（浜文庫／新学小説／19、19A）

【書簡1-7】1941年7月5日 濱一衛より周作人宛書簡（昭和16年7月5日消印）

拝啓 この四月、三ノ宮で御拝眉の榮に浴してから早や数ヶ月になります^{注15}。五月に京都で會つた魏敷訓^{注16}さんも先生の以前に増したお元氣さに喜んでみました。相不変御元氣のことと拝察申し上げます。

小生も當松山に参ってから三年餘、漢文や支那語の授業を持つてゐますが、餘りにも酷い自分の無力さに、もう一度北京で勉強してみたい念がこの頃とみに起つてゐます。若し私如きに適した地位があれば御世話頂けませんでせうか。甚だ簡単なお願状ですが、先刻大した人間でないことも御存知ですし、自己宣傳を述べることもありません。唐突で失禮な御願ひですが、宜敷く御願ひ申し上げます。末筆ながら皆様によろしくお傳へ下さい。

一衛拝

豈明先生御侍史

【書簡1-7中国語訳】1941年7月5日 濱一衛致周作人信

拜启 今年四月在三宫与您再次见面，一转眼已有几个月了。五月份在京都见到了魏敷训，他也为您比以前更加健康而颇为高兴。想必您和以前一样健康。

小生到松山已有三年多了，现担任汉文和中文课目。深感自己功底浅薄，最近想再去北京学习的念头突然强烈起来。若有适合我做的工作能否为我介绍？这虽然是一封十分简单的请求信，但正如您所知，我是一个普通人，没什么值得夸耀的。此请求非常唐突恐有失礼，请多关照。代问大家好！

一卫拜上

启明先生

注15 1941年4月10日から19日まで、周作人は東亜文化協議会出席のため訪日。この書簡により、4月10日神戸到着時に濱と面会したことがわかる。張菊香・張鉄榮『周作人年譜（1885-1967）』（天津：天津人民出版社、2000）613頁。

注16 魏敷訓は1935年に北京大学外国語文学系日文組を卒業、京都の東方文化研究所で吉川幸次郎が主宰する「元曲辞典の編纂」プロジェクトに参加した。「今は我が研究室、臧氏の百種を取りて、次第に之れを積す。昭和己卯に経始して、歳星一周し、中ごろ大戦を更たるも、其の事は廃せず。前後纂修の役に与る者は、青木氏正児、入矢氏義高、田中氏謙二、魏氏敷訓、及び幸次郎、期を尅めて聚会し、各おの其の説を申ぶ」（「元曲選積の序（訳文）」、『決定版吉川幸次郎全集』第14巻、東京：筑摩書房、1968、555頁）。入矢義高『雨窓欵枕集』（奈良：養徳社、1947）8頁の「はしがき」にも、「この翻譯に當つて、吉川幸次郎先生、傅芸子先生、魏敷訓さんのかたがたからは、一方ならぬ御親切な御教示と御叱正を頂いた」と名前が見える。解放後は北京大学で日本語教師を務めた。王升遠「周作人与北京大学日本文学学科之建立：教育史与学术史的视角」（『魯迅研究月刊』2010年第7期）63、66頁、経志江「中日国交断絶期における唯一の日本語・日本文学教授：徐祖正」（『日本経大論集』第42巻第1号、2012）31頁、経志江「陳信徳：中日国交断絶期北京大学の日本語教師」（『日本経大論集』第43巻第2号、2014）252頁参照。

【書簡1-8】1942年（？）1月30日 濱一衛より周作人宛書簡（昭和■年1月31日消印）

拝啓前略 本日仰せに順ひ履歴書二通同封にて御郵寄申し上げます。何卒宜敷御取計の程、御願申し上げます。

この頃久しく御便り申上げず、御宅の御様子も存じ上げないのですが、皆様には相不変御健祥の御事と存じます。小生只今にては二児の父と相成り居ります。若し御縁があれば再び皆様に御會ひ出来ると楽しみにしてゐます。取急ぎ要用のみ記します。

末筆ながら毎々新聞をお送り下さつて有難う存じます。

一月三十日

一衛拝

周先生足下

【書簡1-8 中国語訳】1942年（？）1月30日 濱一卫致周作人信

拜啓 前略。遵嘱、今天将我的履历书（两份）寄去，请多关照。

最近未给您写信也不知您家的情况，想必大家都健康吧。小生已是两个孩子的父亲了，如有机会期待再次见到你们。专此。

谢谢惠赠的报刊。

一月三十日

一卫拜上

周先生足下

2. 周豊一より濱一衛・濱ふみ宛書簡7通（1963年1月6日～1985年9月15日）

原文日本語、中国語翻訳：李麗君、書簡所蔵・画像提供：九州大学附属図書館^{注17}

7通のうち、文革前のものが1通、残りの6通は文革後に文通を再開してからのものである。中島長文氏らの発行する学術同人誌『颯風』に、周豊一が回想録を連載するのも文革後のこの時期である。いずれも流麗な日本語で綴られている。最後の2通は、濱の逝去後にふみ夫人に宛てたお悔やみ状である。なお、シンポジウム論文集において1983年4月27日としていた書簡は、周豊一が封

筒裏面に記した日付に基づき1984年4月27日に修正した。それにより、1984年1月16日の書簡と順序を入れ替えた。

^{注17} 7通の書簡は2017年11月に濱先生の御息女・藤本康子氏より九州大学附属図書館に寄贈され、現在、濱文庫所蔵（濱文庫／書簡／1-7）。

【書簡2-1】1963年1月6日 周豊一より濱一衛宛書簡（封筒は散佚）〔濱文庫／書簡／1〕

（書簡一枚目は散佚）

拜讀しています。又目加田誠先生^{注18}、入矢義高兄^{注19}等の文章も目を通してののです。その度に或る感に打たれて昔を偲ばせられて仕舞ふのです。主に大学時代の事で、短暫な浪速高校の生活をも思ひ出します。三十年程前の事だから夢の様です。

北京は首都でい乍ら、三年の災慌も相当嚴重に受けた事だ^{注20}。でも去年から人民生活が段々よくなって来、「大形【型】好转【転】」とも云ふべきでせう。でも捲タバコの供應はまだ人の意に如らず、月に十位分配されているが、僕の様な「煙突」とあだな付けられた者にはなかなか足る様がないのです。一九六〇年、僕が労働に行った時はタバコの代りに茶葉をパイプに入れて吸っていた位だから、生活上の必需品は食糧が第一位でしたら、タバコが第二位です。

僕は週に一二度日本文を教へています。本館の五六人の外、色々な机关【機関】から有志者が習ひに来るので、二時間と云ふけれど、非常に疲れる。图书馆【図書館】で流通する書物は、中国文は勿論第一位を占め、第二位は日本文書物です。ロシア語より凌駕している位だから、日本文を習ふのも緊要任務です。僕は「光榮的任務」を背負っている譯です^{注21}。

下手な文筆で失礼しました。先づ御礼を申上るのみ。

御家族皆様へ宜しく

周豊一

六三年一月六日

【書簡2-1 中国語訳】1963年1月6日 周丰一致滨一卫书信

（此信似有一页缺失）

正在奉读。又目加田诚、入矢义高兄等的文章也在拜读。其间感慨万千，往事历历在目。总是回忆起大学时代的事情，有时也会想起短暂的浪速高中时代的生活。因为已经是30年前的事了，所以仿佛像做梦一般。

北京虽是首都，却也受到了三年自然灾害的严重影响。但去年人民的生活逐渐变好，应该说形势大有好转。不过香烟的供应还是不尽如人意。一个月十支左右的配给，对于我这样外号叫作“烟筒”的人来说，是怎么都不够的。1960年我去下放劳动时，用茶叶代替烟叶放在烟管里抽，像我这样嗜烟如命的人，如果说生活必需品第一是粮食的话，那么第二就是香烟了。

我每星期教一两次日文。除了本馆的五六个人以外，还有来自各个机关的想学日语的人。虽然只是两个小时的课，但还是感到疲惫不堪。图书馆的藏书，借阅量最多的当然是中文书籍，其次是日文书籍。可见日文的地位已经超过俄文，学习日文也成了紧要任务。所以说我肩负着“光荣任务”。

拙笔见谅。特此致谢！

请代我向您全家表示问候！

周豊一
六三年一月六日

注¹⁸ 目加田誠(1904-1994)は中国文学研究者、九州大学教授。1933年10月から1年半、北平に留学し、周豊一とも交遊があった。九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学術交流』(福岡：中国書店、2019)に詳しい。

注¹⁹ 入矢義高(1910-1998)は中国文学研究者。書簡の当時は名古屋大学教授、のち京都大学教授。周豊一との交遊について、次のように述べている。「この年【1933年】の八月、国立大学の支那文学、支那哲学、東洋史を専攻する学生に外務省の対支文化事業部(?)から補助金が出て、北京へ短期間、ひと月余り、ただで行かせてくれるというので、この機会を逃がす手はないと思ひまして、それに参加しまして、初めての中国に行きました。北京だけです。その時に収穫がひとつありました。周作人先生の息子さんの周豊一さんは日本文学、特に現代文学専攻でして、よくお宅に招ばれたりして、周作人先生のお話をうかがったりしたものです。(中略)わたしの卒論のテーマは「公安派の文学論」というものでしたけれども、その資料は、さきほど話しました周豊一さんのお父さんの周作人先生が、「閑適派」などと悪口を言われながらも、林語堂氏とならんで、明末文学ブームの一方の旗頭でいらした関係上、さまざまな雑誌・文献が出版されたのを、周豊一君が片っぱしからわたしのところへ送ってくれまして、それを全部読んでましたので、それをまとめることはそう困難ではなかったのです。」(入矢義高「今まで歩いてきた道」、『空花集：入矢義高短篇集』京都：思文閣出版、1992。286-290頁)

注²⁰ 1959～61年にかけて、数千万人が餓死したとされる3年大飢饉を指す。

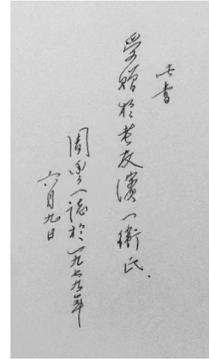
注²¹ 周豊一の逝去後に北京図書館が発表した「周豊一先生生平」によると、豊一は1947年2月に胡適の紹介で北京図書館に入り、日文編目組に所属した。1984年9月退職。(尾崎文昭「周豊一氏の逝去を悼む」、『颯風』33、1997。62頁による)

【附：関連資料】

周吉宜氏によると、1963年7月に濱から豊一に贈られた『俳句歳時記』春・夏・秋・冬(東京：角川文庫、1955)が現存する。春の部の中表紙に「濱一衛兄贈此五冊 六三・七・廿三 文迪記」と記されている。文迪は周豊一の俳号。



同じく濱から豊一に贈られた1979年4月13日朝日新聞夕刊の五十嵐播水「葛祖蘭翁の俳句集「祖蘭俳存」：日本で出版、虚子を心から慕う」の切り抜き、および葛祖蘭氏の句集『祖蘭俳存：私家愛蔵版』(山田桂梧発行、1979年1月)も現存し、「此書／受贈於老友濱一衛氏／周豊一誌於一九七九年／六月九日」と記されている。



葛祖蘭（1887-1987）については、呉衛峰「中国語圏における俳句の影響について：俳句の中国語訳を中心に（その四）」（『東北公益文科大学総合研究論集』41、2021）参照。

【書簡 2-2】1984年1月16日 周豊一より濱一衛宛書簡（1984年1月16日北京消印）〔濱文庫／書簡／3〕

前略。

“日本の民話”、今日受け取りました。ありがとうございます。大変ご面倒なことでしたと思います。私は七十二回目の春を迎えております。別によいことはありませんが、とにかく一九八四年になりました。大兄もお達者でおられることと存じます。どうか長寿になって下さい。

大兄の知っておられた私の友人は一人二人と他界に行ってしまいました。沈令揚、今年兄弟。沈令翔君は生きてはいますけれど、人は已にぼんやりになっているという話です^{注22}。蘇瑞成君は北京大学の私の先輩で、一九七九年肺ガンで倒れた。この蘇君も大兄と面識の人だと思えます^{注23}。

訪日のことは今まで沙汰なしですが、無理にして飛んで行くのが辛い気持ちです。そして行くという考えも薄らいで来たので、大兄の方から訪申しないと、再会の機会はむずかしいようです^{注24}。頑張ってください。“颶風”第十六期は出版した。お届けしませんですか。

一月十六日

濱大兄

周豊一

【書簡 2-2 中国語訳】1984年1月16日 周豊一致濱一衛书信

您好！

今天收到了《日本民间故事》，非常感谢！给您添麻烦了。

我迎来第七十二个春天。虽说没什么特别的好事。但不管怎样已经是一九八四年了。知兄也很健康，企盼您长寿。

兄认识的我的朋友们，如沈令扬、今年兄弟，一个一个都去世了。沈令翔还健在，但听说人已经糊涂了。苏瑞成是我北京大学时代的学长，一九七九年患肺癌病倒了。我好像记得兄长也认识这位苏先生。

访日之事至今杳无音信，勉强飞去心情也不会好。况且我赴日的想法已经淡化，所以倘若兄不来访华，那我们的重逢看来就难了。望兄努力争取访华。《颶风》第十六期已经出版了。您是否

已收到?

一月十六日

致濱兄足下

周丰一

^{注22} 沈令揚（1908-1970）、令年（1914-1980）兄弟は、書法家として著名な沈尹默（1883-1971）の長男と三男。次男は沈令翔（1911-2005）。令揚、令翔と長女・令融（1904-?）は、周豊一と同時期に日本へ留学した。沈長慶『沈尹默家族往事』（北京：中国文史出版社、2017）、酈千明編著『沈尹默年譜』（上海：上海書画出版社、2018）参照。

^{注23} 拙稿「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」（『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015）9頁に、周家で豊一、濱とともに蘇瑞成の映った写真が掲載されている。

^{注24} 周豊一「憶往二三事」（『颯風』19、1987）31頁に、「故友濱一衛氏の軼事一二」という文章があり、次のようにいう。

その後【文革後】、どうやら生きぬいてきた私のことを悦んでくれて、日本へ来いと熱心に誘ってくれたが、私の方も何にかの機会をねらって北京へ来いと浜兄を誘う。浜兄は集团的にはゆっくり話が出来ないから個人的に自由になる時に行ってみたいという。私は静岡へ行ける可能性があると思えば浜兄に知らせた時、自分の娘は名古屋に居るからそこから静岡へ逢いに行くという返事をくれた。しかし世の中を自己の意志で事を運べるほどの力は持っていないから、とうとう日本行も実現出来なかった。

この文章によると、日本行きが実現しなかったのは、申請に対して許可が下りなかったからのようである。

【書簡 2-3】1984年4月27日 周豊一より濱一衛宛書簡（1984年4月27日北京消印）〔濱文庫／書簡／2〕

春とはいえ、非常にひえます。二十三度より急に十五度までさがり、部屋にいてまとも綿入を身につけなければなりません。二日もつずいて“毛毛雨”です。花も咲いているわけですが、私はなかなかそんな風流心がありませんね。ただ部屋に籠っているわけです。出勤は自らやめてしまいました。恐らくは初夏時分になりますと正式に退休出来ると思っています。大兄は毎日何をなさっておりますでしょうか。退窟そうではありませんか。

二月二十三日に「憶往」という短文をかいてみました^{注25}。丁度四十九年前のこの日に小川^{注26}、桂^{注27}、目加田、沈令翔^{注28}諸兄を家で集りました。大兄はその時、私の家に泊っておりますので、當然一緒に夕食を済したわけです。父のその日の日記に、

「……豊一招小川、桂、目加田、濱及沈令翔諸君飯、客多大醉、小川留宿」と書いてありました。私のこの“憶往”は當時のことを思い出して書いたものですが、前翰に已にお知らせしましたと思いますけれど、大兄にごらんさせたいと思っています。どこか間違いがあるかどうかを、そして“颯風”に出そうかと思うのです。

しかし、桂さんも同席だったとは少々不思議のように考えますが、別に親しい友柄でもないのに。大兄の思いは如何でしょうか。やはり一緒だったのですか。

入矢義高大兄は大学から停定【年】された^マと中島長文^{注29}さんのお手紙で知りました。大兄より何年か下だったと思います。昔を思い出すと、誠に懐しいことです。

一九八三年

行く春や一人二人と友去りぬ

めでたさは吾が齒の落ちし大晦日

句作をやめて数年、寂しい時やおのずから嘲りたい時など、やはり十七音を綴ってみたくなりま

す。雑念が多いためでしょう^{注30}。

四月二十七日

濱一衛大兄玉案下

周豊一敬具

【書簡 2-3 中国語訳】1984年4月27日 周丰一致滨一卫书信

虽说是春天，但依然是春寒料峭。气温从23度骤降至15度，在房间里也得穿棉衣。连着下了两天毛毛雨。大概花儿已经开了吧，但我怎么也提不起兴致去赏花。只是闷在家里。我现在班儿也不去上了。大概到了初夏季节就可以正式退休了。兄每日在做些什么？是否觉得无聊？

2月23日我写了一篇短文《忆往》。正好是49年前的今天，小川、桂、目加田、沈令翔诸兄在我家聚会。兄长那时恰巧住在我家，大家自然就一起吃了晚饭。家父在当天的日记里这样写道：“……丰一招小川、桂、目加田、滨及沈令翔诸君饭，客多大醉，小川留宿”。我的这篇《忆往》就是回忆当时的事情，上封信已经跟您提过，想请兄长过目，看看我的记忆是否有误，另外我想投给《颶風》。

其实我跟桂先生的关系并不是很亲近，但是桂先生当时也在场，所以我觉得此事有点不可思议。不知兄长以为如何。或许跟我的想法一样？

中岛长文先生来信说入矢义高兄已经从大学退休了。我记得入矢义高兄比兄长小几岁。想起往事，令人怀念。

一九八三年

匆匆春将归，友人渐离世，寂寞何以堪。

世间除夕佳节，吾齿又没，惟有寂寥，却道又一载。

已经有几年没写俳句了，孤寂时或想自嘲时，还是想写写17音。也许是由于杂念太多了吧。

四月二十七日

致滨一卫兄长足下

周丰一敬上

^{注25} 周豊一「憶往」（『颶風』18、1985）。この日の集まりは、留学を終えて帰国する目加田誠を送る宴。目加田は1935年2月23日の日記に「夜、周作人宅にて送別会。大いに酔ひ、拾がれて帰る」と記す（『目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学術交流』229頁）。

^{注26} 小川環樹（1910-1993）は1934年から2年間、濱一衛と同時に北平留学し、周豊一と親しく交遊した。のち京都大学教授。

^{注27} 桂太郎、京都帝国大学で中国哲学を専攻。1933年より北平留学。

^{注28} 沈令翔と周豊一は、孔徳学校の同学。注22参照。

^{注29} 中島長文（1938-）、中国現代文学研究者、神戸市外国語大学教授。1979年からの北京滞在時に周豊一と面識を得る。『颶風』の発行人として周豊一の回想録を多く世に出した。

^{注30} 小山三郎、鮑耀明監修『魯迅：海外の中国人研究者が語った人間像』（東京：明石書店、2011）には、鮑耀明宛書簡に記された豊一作の俳句が多数収録されている。周豊一の1984年3月30日書状（157頁）に、次の俳句2種が記されている。

めでたさは大晦日に落ちし吾が齒かな

めでたさや邪魔の齒の落つ大晦日

さらに、1989年3月26日付書状に、「俳誌「春聯」は一九四四年あたり、北京に滞在している俳人達の同人

誌（かと思いますが）。ある日小池不釣という方が来られて、訪問されてから投句し始め、毎号のせてくれます」とある。

戸塚麻子「日本占領下北京の俳句雑誌『春聯』について：付・『春聯』目次（1942年3月、1944年1月～1945年2月）」（『常葉大学外国語学部紀要』35、2019）によると、昭和19年1月5日発行の第3巻第1号（24号）に周之萩【萩】「枯葉」、昭和19年6月5日発行の第3巻第6号（29号）の句会報に「北京春聯句会——周之萩氏を繞りて——五月十日 言成子居」とある。周之萩は周豊一の俳号。このように豊一の句作は戦中にさかのぼる。周豊一は1992年以降の晩年に、岐阜の俳句雑誌『水』に投句、掲載したという（『魯迅：海外の中国人研究者が語った人間像』237頁以降参照）。文通相手の鮑耀明にも『鮑耀明句集』（朝日新聞出版、2017）がある。

『野草』第26号（1980）所載の鮑耀明「周豊一氏との書翰」に、1978年12月から1980年1月にかけての往復書翰15通が収録されている。1979年11月23日の周豊一から鮑宛の書簡に、「前有日友濱一卫兄（昭和六年弟就学于大阪浪速高等学校时结识，彼时滨兄读于京都帝大中国文学系。其后多次来北京，居于八道湾，交往已几乎五十年矣）来函，谓十月某日朝日新闻夕刊上，有在长春开日本文学讨论会消息，并称见到弟名云。」とある。『朝日新聞』で周豊一の名前を見たと濱から知らせを受けた豊一は、12月6日、12月22日の書簡でも繰り返しこのことに触れ、『朝日新聞』10月26日夕刊の「日本文学の研究会 中国で十日間開催」という記事をようやく北京図書館で確認できた顛末を記している。

【書簡2-4】1984年4月29日 周豊一より濱一衛宛書簡（■年4月30日北京消印）〔濱文庫／書簡／4〕

先日差し上げました一紙はお手元にとどけたと思います。今度別に大したことはありませんが、妹静子の訃報をお知らせ致します。

命を奪ったのが、例のガンでした。四月二十六日午後五時ごろに逝去という電報が来た。行年七十歳です。去年十二月初から甥からの手紙で静子がかかったというので、病院は体がたいへん弱っていたし、年も年で手術しても仕様がないうので家へ歸り、日本の梅干しが食べたいという手紙が来て、北京にいる日本の友人や華僑から貰って二度送りました（郵便局の非難さはまた格別でした）。のりも送って上げた。せめてもの慰みでしたが、ガンはひろがり【る】一方だった。苦しみのうち目を閉じたことを思いますと、老いた涙も流れ出してしまいました。でも静子はもう父母など親類と一緒にいるから、生きていた親類たちは可哀相うでならないが、人間はいくら威張っても最後は同じく死の道です。考えるとおかしくなって来ます。

第十七期の「颯風」に何にもせないう中島先生にお願いしましたから、多分そうするかも知れません。何故かといえ毎期に数篇も掲載して読者に文句などいわれては語らないと思うし、内容から言うとう極く一般的なもので、日本の読者層に対してはきいたことのない内容といっても、あまり下手な文字だから耻しく感じて来たのです。しかしまたぼつぼつ書くつもりです^{註31}。

では、以上をお知らせ申し上げます。

四月廿九日

濱大兄

豊一敬具

【書簡2-4 中国語訳】1984年4月29日 周丰一致滨一卫书信

前些日子寄给您的信已经收到了吧！这封信并没有什么重要的事。只是想告诉您舍妹静子去世了。

是癌症夺走了她的生命。电报上说，她于四月二十六日下午五点左右离世。享年70岁。去年十二月初，我外甥来信说静子得了癌症，医院说她身体非常虚弱，年纪也大了，无法做手术，所

以只能回家静养。外甥说静子想吃日本的梅干，所以我从在北京的日本友人和华侨那里弄到梅干，分两次寄给她（此事受到了邮局的严厉批评）。还寄了些紫菜。也算是一点儿慰藉。但癌细胞还是不断地扩散。一想到她是在痛苦中闭上眼的，我就禁不住老泪纵横。静子已经跟父母等亲人在一起了，活着的亲人们觉得静子太可怜了。人在世时无论多威风，最后都要走向死亡。一想到人生苦短，禁不住方寸大乱。

我已经拜托中岛先生第十七期《颶風》不要刊登我的文章了，他可能会这样做吧。因为如果每期都刊登几篇我的文章，让读者有怨言的话就自讨没趣了，况且文章的内容都是些极其一般的东西，对日本读者来说，虽是没听过的内容，但因我文笔拙劣，所以还是渐感惭愧。不过我还会陆续写些文章。

特此告知。

四月二十九日

致滨兄足下

丰一敬上

^{注31} 中島長文氏から『颶風』に連載した回顧録をまとめて出版するよう懇請されていたこと、中国国内での批判を恐れて断ったことなどが周豊一の鮑耀明宛1984年3月30日書状より知られる。

颶風〔雑誌名〕十四期から十六期まで、三回も連続して、拙文を掲載してくれましたが、十七期からやめてほしいとお願いしておきました。拙文をあつめて本にまとめると〔某氏〕のご好意だが、私の考えはまた内地で飛んでもない災難にぶつかってしまうおそれがあるのでことわりました。どうもこの世の中にいて、やはり「多一事不如少一事」ということばに従うべきだと信じ切っております。これ以上やられたら、ばかばかしいと思つています。（『魯迅：海外の中国人研究者が語った人間像』158頁）。

【書簡 2-5】1984年5月25日 周豊一より濱一衛宛書簡（■年5月25日北京消印）〔濱文庫／書簡／5〕

五月五日お便り拝読しました。ありがとうございます。

肉親は一人二人と先にたって行かれ、今私と豊二だけこの世に生き残されています。豊二は寂しさそのものとお伴して暮しているのです、おまけに喘息で体が弱り切っているのですから、可哀相な晩年といわなければなりません^{注32}。

私は呑気ながら日を暮らしてはいますが、別に善いこともありません。お酒あれば天下太平という気持です。昔の癖というのかね。今に残っているのはきつい白干兒というアルコール含量の65%のを呑んでいます。ほかのを呑むと、何んだかアヘン呑みがタバコを呑んでいる様で、役に立たないのです。大兄の様な真面目な人でなかったから、仕方がありません。

私は已に出勤にしておりますから、今後お便りを下さる場合は、娘のいるところの「北京市宣武門西大橋十二楼三门六一六号」の方が妥当だと思います。阜外百万庄北里（百万庄宇宙紅の改名）四号楼一门二十一号も結構ですが、いつ引越してしまうかも知れませんから、矢張り宣武門西大橋が安全です。

夏になりましたけれど、時に裕などほしがります。雨は相変らず少ない。却って風の方が多いようです。

ではお大事に。

五月廿五日

濱大兄

周豊一

【書簡 2-5 中国語訳】1984年5月25日 周丰一致滨一卫书信

您五月五号的来信已拜读。谢谢！

亲人们一个个地离世，现在在世的只剩下我和丰二。丰二整日与孤寂相伴，又因哮喘身体极度虚弱，他的晚年只能说是非常凄惨。

我虽悠闲自在，但也没什么特别值得高兴的事。对我来说，只要有酒喝就万事大吉了。可能是积习难改吧，现在我只剩下喝65度的老白干儿的习惯了。如喝别的酒，就好像吸鸦片的人用香烟代替鸦片一样，不起作用。我不是像兄长那样自律的人，没办法。

我已经不上班了，所以今后来信请寄到我女儿那里“北京市宣武门西大桥十二楼三门六一六号”为妥。寄到阜外百万庄北里（由百万庄宇宙红而改）四号楼一门二十一号也行，但也许什么时候会搬家，所以还是寄到宣武门西大桥更为保险。

虽已入夏，但有时还是想穿件夹袄。今年雨水很少，但常刮风。

请多保重！

五月二十五日

致滨兄足下

周丰一

^{注32} 鲁迅（周樹人）（1881-1936）、周作人（1885-1967）、周建人（1888-1984）三兄弟のうち、周作人には妻・羽太信子との間に豊一（1912-1997）、静子、若子の三子がいた。生物学者であり、中華人民共和国で高官となった周建人には、妻・羽太芳子との間に鞠子（馬理）、豊二（1919-1992）、豊三の子がいたが（夭逝した子を除く）、この手紙の当時は豊二のみ存命であった。

【書簡 2-6】1985年8月28日 周豊一より濱ふみ宛書簡（1985年8月28日北京消印）〔濱文庫／書簡／6〕

拝呈

突然お手紙を差し上げまして失礼申し上げ致します。

実は執友濱兄の御不幸なることに何にも悔む言葉もなく、ただぼんやりと失礼のまま暮らしてまいりまして、お允しのほどお願申し上げたく存じます。今般また中島夫人^{注33}より奥様からの濱兄のお形見として頂く衣類をわたして、悲しいやら嬉しいやら何とも言えない気持で、頭を下げて頂きました。どうもありがとうございました。

最近私は「故友濱一衛氏の一二軼事」という一文を草しまして、昔時代濱兄の北京留学時期のことを思いながら書きましたもので、「颶風」に掲載して頂くつもりでございます^{注34}。事情は過ぎ去って五十年にもなりますけれど、ありありと私の目に浮んで来ますのがありがたいと思っております。

私もお蔭様で老態で居ながらも今日までいきのびてまいりました。他事ながら一筆加えさせていただきます。

ではくれぐれもお体をご注意のほどお願申し上げ致します。

八月二十八日

濱夫人へ

北京において

周豊一

【書簡 2-6 中国語訳】1985年8月28日 周丰一致滨芙弥书信

谨呈

突然去信打扰，还请原谅我的冒失。

对于挚友滨兄的不幸离世，不知道该说什么才好，只是在恍惚和失礼中挨到今天，还望宽恕。此次收到您托中岛夫人转交的滨兄遗物——衣服，那种心情是悲还是喜，难以言表，感念不已。多谢您了！

最近我写了《故友滨一卫的一二轶事》一文，回忆昔日滨兄在北京留学时期的事情，我打算交给《颶風》杂志发表。幸运的是事情虽然已经过去五十年了，但还是历历在目。

请允许我附加一笔，托您的福，我虽然已经老态龙钟，但仍苟延残喘至今。

万望保重身体！

八月二十八日

致滨夫人

于北京

周丰一

注33 中国文学研究者の中島みどり氏（1939-2001）を指す。『颶風』を発行した中島長文氏の夫人。

注34 1987年の『颶風』19号に掲載された。注24参照。周豊一の鮑耀明宛1985年10月26日書状にも次のように記されている。3編のうち「掛字の復帰」のみ未刊。

「颶風」のおやじさん北京をヶ月ぐらい滞します。日本文で書いた「掛字の復帰」「故友濱一衛氏の一二轶事」と「母のレコード」など短文を「某氏」に渡し、掲載して頂けると思います。（『魯迅：海外の中国人研究者が語った人間像』177頁）

【書簡 2-7】1985年9月15日 周豊一より濱ふみ宛書簡（1985年9月15日北京消印）〔濱文庫／書簡／7〕

謹呈 お手紙拝誦致しまして有り難うございました。去った十年の間にととう濱兄と逢えずに終えたことにたいして、誠に何んとも言えぬ淋しき心地でした。人間の力及ばぬことと知りながら、一生残念と思はねばならぬこととなりました。

お悲しみのことでございませうが、濱兄の御逝去される前後のことについて、簡単でよろしいけれど、小生にお知らせ下さればと思っております。甚だ失礼なお願いで、どうか悪しからずお允のほどお願い申し上げます。またお一人暮とのことで、さぞはお淋しいことでございませうが、名古屋に長女の方がおられるので、あちらへ暫くお住みになれば、氣も晴れますでせうと思われま。

それに濱兄は小生より三つか四つ年上で、明治四十二年か三年のお生れではございせんか。私は大正元年ですけれど、七十三の老態になっております。では、たいへん我儘なことを申し上げまして失礼致しました。お体をくれぐれもご注意のほどお願い致します。

敬具

九月十五日

濱ふみ様

周豊一

【書簡 2-7 中国語訳】1985年9月15日 周丰一致滨芙弥书信

谨呈滨芙弥女士

尊函拜读，非常感谢！过去的十年，到底还是未能与滨兄重逢，对于此事，我一直有一种难以名状的落寞惆怅。虽然知道有些事情无能为力，但仍将抱憾终生。

又要惹您伤心了，不知可否请您简单告知滨兄过世前后的情形。这个请求颇为冒昧，还望宽恕。另外，听闻您现在一个人生活，想必一定很孤寂吧。名古屋那里有您的长女，如果能去暂住一段时间，也许可以转换一下心境。

滨兄比我年长三、四岁，应该是明治四十二、或四十三年出生的吧。我是大正元年出生的，已是七十三的老者。请原谅我任性地提出了一些失礼的要求，很是抱歉。请千万保重身体。

此致

敬意

九月十五日

周丰一

3. 濱一衛逝去後に濱ふみ夫人より周豊一に贈られた形見の和服

原文中国語、日本語翻訳：中里見敬、和服とメモ所蔵・画像提供：周吉宜

2023年8月、周豊一の御子息である周吉宜氏より、母（張菘芳）の遺品を整理していたところ、濱一衛の形見として送られてきた着物（長着）と、それに付された張菘芳氏直筆のメモが見つかったとの連絡を受けた。ふみ夫人が周豊一と親しい中島長文・みどり夫妻を介して、豊一に渡すよう託したものである（【書簡2-6】参照）。

【メモ3-1】年月日不詳 張菘芳（周豊一夫人）留条

日本友人濱一衛之遺物

此和服及腰帶系于濱一衛先生逝世（约在九十年代初）后，濱夫人自日本邮寄贈予周丰一留念的。夫人信中说明这是滨先生生前衣着。同时寄贈的另有一件毛料和服，已经我家改制衣裤穿用了。

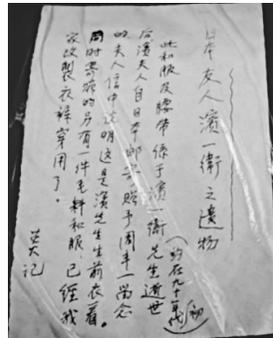
菘记

【メモ3-1 日本語訳】年月日不詳 張菘芳（周豊一夫人）メモ

日本人の友人・濱一衛氏の遺品

この着物と帯は、濱一衛先生の逝去（1990年代初めごろ）後に、濱夫人が日本から郵送され、周豊一に記念にするようにと贈られたものである。夫人のお手紙に、これは濱先生が生前に着ていたものだと記されていた。同時に贈られた毛織物の着物一着は、我が家で服とズボンに作り直して着用した。

菘記す



(付記)

書簡の翻刻掲載にあたり、周豊一の御子息・周吉宜先生、および濱一衛の御令嬢・藤本康子氏よりご許可いただいた。また周吉宜先生、および九州大学附属図書館には、図版使用の許可をいただいた。翻字に関して稲森雅子・中野徹、列車時刻表について中野知洋・中野徹の各位よりご教示を得た。記して深甚の謝意を表したい。

本研究は JSPS 科研費 JP18KK0010、JP21K00328 の助成を受けたものです。

周作人、周丰一与滨一卫、滨芙弥往来书信

中里见 敬·顾 伟 良·李 丽 君

中国现代文学泰斗、北京大学教授周作人(1885-1967),于1934年至1936年好意约请日本留学生滨一卫(1909-1984)寄宿于八道湾周府,并热情款待,情同家人。在此之前的1931年,作为京都帝国大学本科生的滨一卫,与就读于大阪浪速高等学校的周作人之子周丰一(1912-1997)结为好友。从北平留学回到日本后,滨一卫于1939年再次赴北平拜访周家,但之后再也没能访问中国。

近年来,周家和滨家尽心竭力,发掘出滨一卫留学期间至去世前后的15封往来书信。其中部分书信曾在2018年2月6日九州大学中央图书馆举行的学术研讨会上展出,而且所有现存书信均在该研讨会的论文集中发表。

即使在战争、日中断交、文革等困难时期,周家与滨家也一直保持联系保持友谊。他们之间的书信交流不仅是留给后人的珍贵记录,而且对于周作人研究,对于了解九州大学教授滨一卫开创中国戏剧表演史研究的学术背景,同样具有重要意义。

此次,我们重新收录研讨会论文集集中的信件,并对原文文字的辨识有误之处,以及文字录入时的错字进行修改,同时还对一部分译文做了改动及润色,而且补充了详细的注释。此外,周家还提供了新材料,包括滨一卫去世后滨一卫夫人寄给周家的和服。由于篇幅有限,书信的图片请参阅《“春水”手稿与日中文学交流:周作人、冰心、滨一卫”国际学术研讨会论文集》所收下面两篇文章。

《滨一卫致周作人、周丰一书信8件》(<https://hdl.handle.net/2324/1913966>)

《周丰一致滨一卫、滨芙弥书信7件》(<https://hdl.handle.net/2324/1913967>)